國學院大學学術情報リポジトリ「K-RAIN」

御旅所祭祀

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 壯司 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002331

御旅所祭祀

岡田　荘司

一、御旅所祭祀の成立

神社の祭礼といえば、その多くは神輿（または鳳輦）が渡御する神幸祭（帰途を還幸祭ともいう）の行列を想い出す。渡御の行き先は、神社の創祀にかかわる由緒の地（石清水放生会における頓宮など）、または祭礼区域内の御旅所などである。後者については、平安京中の都市祭礼、御旅所祭祀がその淵源となる。

京中祭礼の成立が確認できるのは、天延二年（九七四）の祇園御霊会（祇園祭）はじめ、北野天神会・松尾祭・今宮御霊会・稲荷祭（稲荷御霊会）などが、平安時代中期の日記・記録に見られるようになる。その様子は、平安時代末期、後白河院の宝蔵に納められた『年中行事絵巻』に、七条大路から賀茂川を渡り東に向って還幸する稲荷祭と祇園御旅所の幄舎が取り壊され、大路を進む祇園御霊会の行列が精緻に描かれている。

京中の祭礼は、災害・疫病が多発するなか御霊信仰が隆盛し、悪鬼を祓う祭儀として拡大していった。京外の霊威ある大神の神霊を一定期間、御旅所に招いて、年ごとに盛大な祭礼を催し、神威は高められた。祭礼の恒例化には御旅所の確保が欠かせない。御旅所の敷地は京中住人が寄進し、庶民の独自性と心意気を示す盛大・華美な祭礼になっていった。のち豊臣秀吉のとき、稲荷と祇園の御旅所は、洛中洛外の区画整理で、それぞれ九条と四条の現在の御旅所に移転することになる。

伏見稲荷大社　御旅所（九条）

賀茂川を渡る稲荷祭の祭礼行列
（『年中行事絵巻』京都市立芸術大学芸術資料館蔵）

二、祭礼行列の構成

『年中行事絵巻』に描かれた行列の構成は以下のとおりである。

【稲荷祭】騎馬の陪従（楽人）・風流傘をさした騎馬巫女・儲の馬・騎馬田楽・獅子舞五頭・大御幣・舞楽散手の舞人・神輿五基（下社は六角鳳輦）と駕輿丁（前後に大御幣、騎馬の楽人など）・騎馬の神官など

神輿に従う騎馬の神職
（『年中行事絵巻』京都市立芸術大学芸術資料館蔵）

【祇園会】田楽の一団（行列とは別）・警備の騎馬乗尻・御幣・風流傘の女騎馬・市女笠を被る騎馬巫女・舞楽の散手・太鼓・笛ら楽人・獅子舞・神木と御幣・鉾を持つ人々・獅子舞・神輿三基・騎馬の陪従・騎馬の神官・駒形稚児・細男姿の楽人など

祇園御霊会の三基の神輿は、第一神輿の牛頭天王（素戔嗚尊）、第二神輿の婆利女（櫛稲田姫命）、第三神輿の八王子（八柱御子神）がつづく。この行列については、今宮御霊会とする説もあったが、神輿頭部の順番が鳳凰・葱花・鳳凰であること、また國賀由美子さんが指摘された通り（「後白河院と祭礼」『別歴史手帖』第一五巻六号、一九八七年）、神輿の後に駒形稚児の存在が確認できることから祇園御霊会の図であることが確定している。

稲荷祭と祇園御霊会の行列は近似する図柄が多く、ともに風流傘や田楽・獅子舞を伴っており、御霊会系統の祭礼であることが一目でわかる。稲荷祭が平安時代に「稲荷御霊会」と呼ばれていたのも、祭礼の形式によるものであろう。共通する行列の特徴は、神輿を先導して風流傘・御幣・獅子舞や楽人が進み、神輿の後方には神官が供奉する構成である。獅子舞は道や祭礼区域内を祓う意味をもち、現在の全国の祭礼行列に受け継がれている。祇園御霊会の行列では、鉾を持つ神人の姿が注目される。これは現在の長刀鉾など山車に乗せた鉾に継承されている。舞楽が伴うことも都の祭礼の特徴であり、こののち諸国一宮の祭礼に波及する。

京中祭礼、御旅所祭祀の行列構成は、一宮祭礼である香取神宮幸祭をはじめ華麗さを競う江戸の天下祭といわれた山王祭・神田祭、近世城下町の祭礼など、各地の祭礼に伝播していった。

祇園御霊会の祭礼行列
（『年中行事絵巻』「祇園御霊会」旧岡田本本学所蔵）

駒形の稚児
（『年中行事絵巻』京都市立芸術大学芸術資料館蔵）